

# 見学調査報告書

---

テーマ : 東日本大震災被災地域における道の駅の役割と課題  
ゼミ名 : 斎藤 正武ゼミ  
調査日 : 2022年11月2日(水)  
調査先 : 道の駅 おながわ(飯館村 までい館)  
授業科目名 : 演習Ⅲ・Ⅳ  
参加学生数 : 2名(4年)

## 調査の趣旨(目的)

今回の訪問は、斎藤ゼミで今年行っている卒業論文(東日本震災地における道の駅の発展可能性)の研究の、文献調査だけではわからない運営方法や、地域協働での進め方などについて、現地でのヒアリング調査を行った。また、地域創生の観点に関しては、地域において、レトロフィット型のスマートシティは道の駅を中心として行われていくことが多いと考えられているので、実態を把握するために現地に赴いた。成果については、分析を行い、卒業論文制作に向けて、ヒアリングのまとめを行う。今回は、3・11の震災で被害を受けた道の駅おながわ および 飯館村の道の駅でどのような復興を遂げたかについてヒアリングする。

## 調査結果

道の駅おながわの役割については、地域観光の促進、地域産業の振興、地方創生の拠点、震災復興の拠点としての役割を担っている。道の駅おながわの所在地は東日本大震災当時、津波で全て崩壊したのち、町の再開発をした場所であり、テナント型商店街としてエリア登録された場所である。そのため、町の中心となる機能が揃っていることから、上記全ての役割を担っている。大震災との関係は、道の駅おながわは震災後にオープンしたため、震災の被害は受けていない。また、道の駅おながわの所在地は災害危険区域に指定されており、人の居住可能エリアではないため、防災拠点としての役割は担うことができない。震災復興との関係は、町の中核機能が集まる道の駅おながわ付近のエリアに来訪客が来るようなイベントを含む政策を行っている。それにより、観光客が目的地として来訪するようになった。道の駅という名前になっているものの、これからも、テナント型商店街として発展していく地区との回答であった。

飯館村までい館の役割については、地域の震災復興の拠点としての役割を担っている。までい館の設立の経緯だが、東日本大震災に伴う原発事故による全村避難から帰村できる環境整備のための復興計画の確定により国からの補助金等で建設された施設である。復興の拠点、帰村をできる環境整備のためのシンボリックな位置づけで作られた。帰村された村民の方が併設しているセブンイレブンを運営している。飯館村で日用雑貨品、食料品とお買い物ができる場所はセブンイレブンだけである。また、村民が生産する農作物を販売する場でもある。原発事故により、帰村が困難となっている村民が集う場所でもある。原発事故による

風評被害の払拭に努めている点が、他の地域の道の駅とは異なる役割を担っていると考える最大の理由である。今後の目標として、労働力不足の解消、雇用創出、継続的な利益の創出、地元出身者が働きたいと思えるような道の駅の環境作りが挙げられる。

重点道の駅に選ばれている2つの駅であるが、場所によっておかれた位置づけ、役目が違い、被災地という一括りではなかなか考察できないともわかった。

